
人殺しって呼ばないで！（仮）

木瀬暦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人殺しつて呼ばないで！（仮）

【Zコード】

Z8997Y

【作者名】

木瀬暦

【あらすじ】

舞台はどこか別の世界。

濡れ衣を着せられ人殺しと呼ばれた少年の物語。

「本当に嫌になっちゃうよねー」

(注)試験勉強する気が無くなつた作者の暇つぶしの作品です。更新していくかわからないしこの作品が処女作なのでもう文とか無茶苦茶です。

それでも仕方がないから、暇だからといふそこのあなた！
どうか読んでといってあげてください。○'z

因みにタイトルが（仮）なのは友人が考へたからです。やっぱり処
女作のタイトルは自分で考へたいです。

第5話改正しました。

第1話～看守と人殺し～

何故こうなった…？

と、暗く冷たい檻の中で考えてみる俺。

もつ何度もだらり、あの口のことを考えるのは…？

「…はあ……」

ああ思い出しただけですぐに溜め息が出る。
もつこれで何回田になるかわからない。

よくぞ、溜め息をつくと幸せが逃げるよりて言われない？
まあ俺はよく言われること何だけどさ？

そのたびに思う訳よ、俺は溜め息で逃げるよつた幸せが欲しい訳じ
やないんだ！って。

でも今こんな所でさうやって愚痴つてる俺つて結構不幸だよね？
ああ不幸、不幸。

そのことを考えると本当に溜め息つて良くないのかもね？

だがしかし勝手に出でしまつ溜め息。
それに伴う幸せの逃亡と不幸の来訪。

悪循環つて奴？

つかあ～やだやだ。まあ悪循環つて言葉自体は嫌いじゃないんだけど
どね？

え？そんな事は聞いてない？

あら、案外冷たい。

いいじやないそんな顔しないでよ。

：まあ、顔なんて見えないけど。

あれ？ちょっとイラつてきた？

いいじやない俺と君の仲だろう？

え？どんな仲だつて？

そりゃあアレじやない？

やっぱり……

看守と犯罪者？

第2話～回想～

～3日前～

故国であるアミタ王国を抜けて旅に出てもう5年になる。
ああ、色んなことがあったなあと思い出を懐かしみながら旅を続ける。

昨夜泊めてくれたシシトコ村という小さい村に住んでいるお婆ちゃんとお爺ちゃんに朝お礼を言つて旅を再会してからもうだいぶ時間が経つ。

陽が高く登りもつ蜃かという時分にとても大きな門が遠くに見えた。

「あはは、やつと休めるね。もつお腹ペコペコだよ」と独り言を言つ俺。

地図によるとアソコはラクト王国という國らしい。

自分の國も大きい方だがそこは自分の國より大分大きい。

ワクワクしながらスキップで向かっていると（何故か通りすがりの商人に笑われた）意外にすぐにたどり着いた。

うわ、すごい人。

「こんにちは！いい天気ツスねオジサン！」

機嫌がいい俺は門番のオジサンに挨拶をしてみる。

「誰がオジサンだ！俺はまだ25だ！」

怒られた。

「「」、「めん。門番の人。俺旅の者なんだ。観光したいから中に入
れてよ」

「入国証を見せろ」

「に、入国証？」

「なんだ、もつてねーのか?じゃあ駄目だな、出直してきな」

落胆した。俺はもう美味しいご飯を食べる気満々だった。宿屋のふ
かふかのベッドで寝る気満々だった。
…もう今更野宿する気にはなれない。

「…ねえ、門番の人？」

「ん?何だ?入国証持つてない奴は入れねーぞ」

「あつ!何だアレ!?」

「何だ?つておい!」

まさか本当にこんな手に引っかかるとは…大丈夫かなこの国の警備
は。

「おい誰か、そこの男捕まえてくれ!不法入国者だ!」
…………
え?

「やばつー早く逃げないとー！」

それから俺はもう持てる力を全て出し切つての猛ダッシュ。
かくして俺は入国に成功（？）した。

第3話～事件～

不法入国から數十分後。

「やつと逃げ切れただけど…」

もつれじやびの宿屋でも泊まれないし料亭にも入れないだろ
な。

多分入った瞬間通報だよ…

あてにれからぢしそうか？

一応武器は持ってるから追いつめられても何とかなるだろ
う。でも出来るならばなるべく気づかれないうちで早く出国したい。
難しいけど路地裏とかを通つていけば何とか…。

と、思つて今この「ミミ箱の中から出でたやつをすぐそばの路地に入
りことした。

「居たぞ…！」

瞬間気づかれた。

「早く逃げないと…！？」

別に路地裏が行き止まりだったから驚いた訳じゃない。
そこにあつたのは…。

死体。十数人ほどだろうか？沢山の兵士、中には要人らしき人もいたが……。

皆同じように切り刻まれて死んでいた。

「…………は？」

「おいー！ ちだー！」 ちに入ったぞー早く…………うわああああ！
？」

「おいー！ どうした！？ 大丈夫か！？」

「なつ、何だこれは！？ 貴様何てことを！」

「ち、違うー俺じゃない！」

マズい、人が集まり始めた…仕方ない…。

「よつと」

「跳んだ！？ なんて跳躍力だ」

「感心してる場合か！さつさと捕まえるぞ！」

ヤバい、ヤバい！ 不法入国者どころか大量殺人犯になっちゃったよ！？

店の屋根の上を飛びながら逃げていた俺はかなり焦っていた。

「残念ながら貴様はここまでだ」

だから上から降つてくる大きな火の玉にも気づかなかつた。
俺が覚えているのはここまでかな。

第4話～捕らわれの身～

「…もうじて今に至るわけか。わかつてくれた?」

「いや、もう凄く嘘っぽい」

「いやいや、証拠もないのにこの扱いは酷いよ…」

「だつて剣持つてたじゃないか」

ん?

「あのさ、看守さん? 何で俺が剣持つてたって知ってるの? 後何故か看守さんの声俺があの時最後に聞いたあの声に似てるんだけど?」

「私は看守ではないのだが…まあ貴様の質問に答えるとあの時魔法を放つてお前を捕らえたのは私だ。ああ、心配するな。剣ならちゃんと拾つておいた。まあここから出られるかどうかもわからんがな」

やつぱりあんたか! って、

「え? 俺出られないの?」

「そりやあそудだろう。不法入国したうえに兵士十数人に国の宰相一人殺しているんだ、恐らく死刑は免れないだろうな」

「え、マジで! ? 違うんだよ本当に俺じゃないんだって!」

「諦める、ここはA級犯罪者が収容されている施設だ。ガードも固

いから脱獄も不可能だ」

「いや、まあ剣さえあつたら脱獄なんて簡単だけどね」

「ふふん、面白い冗談じやないか」

別に冗談じゃないんだけど……。

「いや、ホントだつて」

ふん、戯れ言を

出来ぬにては

（一）「モルヒーネ」

...一ノチッ?

「よーし、よくわかったー。やーりめで囃しなりやつてもりおひじやな
いかーせりーお前の剣だーー返してやねか!」やつてみやつーーーー。

うわああああ！？怒つたよこの人！？何で怒つてんの！？

「ちよつと落ち着いてよ、

「うなごーーこれが怒りすこいられるかーー。」

えー… ビこの部分で怒ったのこの人?

(ガチャリ)

ん?誰か来た?

「！」にいたか。第三軍大將、イズミ・ハヤセ」

ええつー!? 看守さんは看守さんじゃなかつたの!?

「誰だ貴様は?」

「…ふん。言葉遣いがなつていかないようだな。まあいい、イズミ・ハヤセ、貴様は反逆罪で明日には処刑だ。私は貴様の後釜、ここを管理する権利と第三軍大將の地位は本日を持つて私が受け持つことになった」

……。

「な、何!?! そんな馬鹿な!」

「ふん、何を白々しい、宰相を殺しておいてよくもそんな演技が…
ち、違う! それはこの不法入国者が…!」

「ああ、そうだな。君、無罪だよ。おい、お前、釈放してやれ」

「ハッ!」

「あー、ビーもー」

「イズミ・ハヤセ、貴様は明日までここで拘束する。朝が来たら処

刑だ

「へんつーべうなつている…?」

「あ、顔もよく見えないがそこの君、私はもう行くからね、好きに出て行ってくれてかまわないよ」

「了解しました将軍殿ー」

俺はもう閉まつた扉に小さくそつ呟いた。

第5話 脱獄

新しい將軍様が出て行つた後。

「ハナヲ、アリハナツヘル...?」

「あーあ、捕まっちゃった

「うるさい……ああ、やべ……何故にこんなこと……」

はあと溜め息を吐く元・將軍様。

「あのね、溜め息忏へと幸せが…」

「やかましい、その話は半刻程前に聞いた」

「まあ、いいじゃん。それより、これがどうすんの？」

「貴様の知つたことではない」

「冷たいの」

「……どうしようもない。せめて王に謁見できれば……」

「王様にあつても無理だと思つけど？」

一
何
？

「だつてさ、宰相さん達殺したの多分あの人達でもう王様に嘘ばつ

か吹き込まれてこると思つよ?」

「…何故そう思つ?」

「IJIの事件で得をしたのは先刻のオジサンと次の宰相さん。アンタの後釜があんたの直属の部下じゃあないってことは、まあ、新しい宰相さんが手を回したんだろうね。理由は…そうだね…ここはA級犯罪者が集まつた施設なんでしょ?だから、第三軍隊の軍事力と犯罪者グループでつくられた私設軍隊の入手とかかな?」

なんか嫌な感じがする。俺はちょっと面倒くさい国に丁度いい(いや、勿論よくないが)タイミングで入り込んでしまつたようだ。

「…成る程な…打つ手なしか」

暗い空間に沈黙が下りる。

「…あのせ、逃げちやえば?」

「…言つただろう、不可能だ。そのことはここに管理をしていた私が一番知つてこる」

「言つたじやない、可能だよ。そのことは俺自身が良く知つている

「…………IJIの檻と壁は特別製なんだ、強度が半端じやない。魔法が使えば脱出の為の穴ぐらは作れるかもしけんが壁と檻には『消魔石』が含まれていて魔力も使えない。くそつ、せめて私の刀があれば……!」

「じゃあさ、俺が逃げるの手伝つてあげようか?」

「貴様が？出来るのか？」

「えい」

そつと言つて剣を振る俺。

(パキンッ！)

特別製らしい白檀の檻は俺によつて綺麗にバラバラにされた。

「…え？」

「だから出来るつていったじやんか。よーし、準備は良い？はい、壁斬りまーす！」

「おい待て！」

(ガララッ！)

俺が斬つた壁から光が入つてくる。俺はふと自分が話していたこの人は一体どんな人なんだろうと思ひ、後ろを振り返つてみて…なんというか…その…驚いた。

外から射し込んでいる光に照らされていの今まで俺と話していた元・将軍様は、俺が見たことも無いような綺麗で長い黒髪をもつた若い女性だった。

「おー！ボーッとするなー！」

へ？

「貴様！何をしていいんすか？」

「おーい！イズミ・ハヤセが逃げるぞー！」

やばー見つかった！

「だから待てといつただろー！」

「そんな事言つてる場合ぢやないでしょー！？早く逃げないとー。」

「オイ！待てー！手を離せー！」

「逃げたぞー！応援を求むー！それと誰かこの事をサギタ様に報告をー。」

追つてくる大人数の足音と鎧のすれる音を背に俺は収容所の外壁を
斬り裂いて俺たちは逃亡を開始した。

第6話～逃亡中～

収容所から逃げ出した俺たちは迫り来る兵士たちから取り敢えずは逃げきっていた。

「足おつそ…」

発見されたときは内心焦ったが逃げ出してから1分程で追っ手を振り切ることに成功していた。

「鍛え方が足りないんじゃないの？国を守る兵士がこんな少年に逃げられるなんて」

「…お前は何者なんだ？その身のこなしがいい剣の腕といい、何故私を助ける？」

「その話は今はいいじゃない。取り敢えずせつねとの国を出ようよ」

イズミさんは何か訝然としている感じだったが俺は無視して歩を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8997y/>

人殺しって呼ばないで！（仮）

2011年12月20日22時52分発行